# 伊勢奈宮名所圖會 二


和書門
類 八六六二
號
函 九五
架 八
冊 六

内閣文庫
和書
類 八六六二
號
冊 文二
函 二四
架

内閣文庫
番號 和 8662
冊數 6 ( 2 )
函號 172 320


糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

# 伊勢參宮名所圖會巻之二

目録

勢田橋○宮瀧場○頓宮旧跡
建部明神 祇園社 大茅新田 川淵池
野路玉川
鞍嵜八幡
草津驛 栗の化石
立本明神
栗太郡○日野○栗太樹
老上川 玉水の池
乳母が餅
常善寺
坊袋
三上山○擂山
伊勢落○金ゑ
阿星山 東寺 西寺
横田川 梵字岩 烏帽子岩
大宮社
岡村
灰塚山
善光寺
石部驛 吉姜吉姫の社 落合川
針村 田川
馬場先八幡
目川
袴○手原○小野
上野○林
水口驛
勢田驛
樫原
山田矢橋
草津川○下新屋敷
川面 日池
梅の木 是嶺
甲賀郡 日三郎九郎
拂子袋○平松
泉○北脇○林口
大德寺

青蓮文庫

大國寺　城山
栗林○彩城○小里
弁形石○若神　今在家
大野○德原　市場○糸野
田村明神　田村川
猪鼻　山中○聚楽寺
鈴鹿山○三神山○坂本○田村社
○猪石　○猪巻坂
橋弁天　伊勢海砌
金藏院　小女溪
沓掛　櫛木
權現山　四彩茶屋
茶碗淵　一瀬ヨリ川
御影嫂塚　清見原天皇坂ヶ

正源寺　布引山
稲川○清泉理　瀧樹明神社○伊流川
○金毛院　○今宿
松尾　松尾川　土ヒ訳　○一里山
田尻野　猪塚明神　○岩理地
解脱坂　蟹塚
榎　澤　州境
鈴森社　ヨリ虹宮　鈴鹿川
岩窟觀音　坂下驛
法安寺　燒地藏
一里山　朝日弁天
筆捨山　羽黒山　奇石
大黒石○惠比須石
長持石○えびす石
鈴森関跡　関驛
関地藏　ヨリ開眼活



五そ橋
和琴橋
追分
天神社　ヨリ森
片淵城跡
土岐百塚
空也堂
一身田高田專修寺
大乃己所神社　大部田

久我白石明神
川上瑞光寺　柱現柿
関川
觀音堂
高野尾
窪田
坂部

城跡
湯津盤　ヨリ森
古驛
中縄
豊久野　沙掛松
光明山安養寺
例幣測齋塚
三彩茶屋
小丹浦

三日城
清岸山福藏寺
楠原
掠本
野嵜
六大院
一の宮
中野

国立公文書館
National Archives of Japan

**勢田橋** 大橋長九十七間幅七間 小橋長廿七間幅四間 中島の間十五間合長百九十六間 志賀栗本の境に跨る長橋唐橋又くぶきの橋 大和より名あり

**近江** 国中に水ことごとく皇湖に入て其末流美に聚つ

**宇治川を経て淀川に入る橋の盪觴未詳**

或説に推古天皇元年壬申夏百済化来の者に能く長さ谷川の深を知りて橋を渡を工あり即本曾根其余百八十橋を造りしむ時のへくれを学て踏る橋をつくり此外よりや造り初めいろいろ恵日堂の秘引に見へたり去とも此書実偽未詳○大日本史に天武天皇大友の皇子の戦に渚将進至瀬田帝悉衆陣橋西撤板拒之云○此舟既に板橋ありしとは幼くもとより○或書云後一条院万寿元年に焼たりと其後宇多院弘安年中忍性律師造之云又日甘帝寛文八年二月橋の桁二本自焼る云

新古今集

**橋の板も苔むすまでに成りて久しく成代るあらんせたの長橋** 匡房

**勢田頓宮の舊跡** 淇北赤洋これ秘宮都を出てこの不の頓宮に入せ給ひ御額の掛をぬき

源氏抄 大ねいとにそれ迄ゆかれてさう本よさして

ふりとてく久しく成ぬる川やそせ波に袖ぬるしや

**勢田古戦場** 大友の皇子軍やぶれくれいまこの日関のあるさいかり出て一あるとこ云○是勢田なる

の橋に紙落して軍士の橋ぬ宮ぶくくぶ山隈に入て籠て艶ど後鳥羽院宇治勢田

糸都に入り後を羽院を隠彼の後人迷しに奉る兼久記○中納言知盛源氏と戦此所

**勢田城趾** 川の東にあり山岡義作入道石阿弥城と

勢田鱧 鯉 鮒





**栗太郡** 勢田川より東をいう 苔此地は栗の大本あり因て郡名とす

今昔物語云むかし近江国栗太郡に其家猶朝臣と丹波国氏物ありけり園地五百町ばかりして本の領さ

枝のそびえ高くして木動もする間其国の志賀栗太甲賀三郡の百姓ども本の蔭を求て耕作

霧雲太風にも不動もする間其国の志賀栗太甲賀三郡の百姓ども本の蔭を求て耕作

なりこれ為りて百姓多此郡に来り住ハ本と代例

栗の実後老て繞を成り其舟の百姓の孫今に其郡にあり云

つ按るに此物がたりに枝の本にしてそれ迄も大本其地にあるを以て郡名とす

**栗太里** 栗の実ども今に其地にあり

**龍神祠** 橋の右に両社あり秀郷の孫橋の辺を通に即下馬

**俵藤太祠** 俵藤太祠 橋の右に両社あり秀郷の孫橋の辺を通に即下馬

拝して去らざれば必雨ふると

いふ○是れ世の俗説なれども小祠ばかりにて今に公より修補し弥増しに秀郷の祠あり

橋姫明神の祠あり

**勢田駅** 古神宮勅使進発の会場の関を出て近江往来到勢田駅

**司差供給次到野洲河** 駅を出て

**建部明神社** 一ノ宮 所祭大己貴命天武帝白鳳に多の勧請豊

**葦原一宮の中の其一** 神社啓蒙 武部大社一宮大神天日一命

国立公文書館
National Archives of Japan

平清盛詣頼朝遠流の条下白盛安
大法師たちの人々ぞ多くある上
せうに橋もゆるして乗りてひろの法へ
こうう給へけれ乗りくてお送り
なるに所の社のうへなる紙つるある神
ちし問ふ人のまけべ明神と申佐殿
さうの今夜の清前と通夜して
り給の行りともりさんそこそ
まうるひろる夜ゆけ人ちづ
まりて盛安ゆくるい社中で
清盛家ぬるべうさうる上ゆ
せうい不思議の事ぞと奇
うに故こ君清しゆうあるて
八幡清ゆるりて大法こ座と
盛安清ゆ供して石橋の上ゆ
伺ふ乗りしして十二三斗の童
子ゆ弓箭とりて大法こ



こ世ゆ弓箭の家の
やうのひ乗りて参り
ちとやこれ
こは御家殿の
内ゆりけだる
御ぞこそ清く
おこめこけ給よい
れ給よ給へんどるぞ
先れ給こ食せよく仕
らるれば天ぞう抱れ参て御
れ若垂ぞ行中くんと見
れべれあるひくこ地中畏
れこそ仕らる事へて
清盛ぞ一ば六十六年の
ゆ一を西方の清めく
押ぞうてきこれと三ぬま
りてかきあと盛安こ抱き
せ給ひ一を懐中ことれと
なれひ一ハ下畏

名所

**野路玉川**

日本六つの玉川の其一つ也此みぎわを玉川と唱へ水流ありて萩い咲ころ極しゆうちゃくの地なり

又其一代集歌字名不詳の由緒此所の篠原此国の名所とも云ハ説あり

名所

**草津駅**

此駅中より中山道本曽海道の岐路あり即標石を立つ

千首

芝津より浜より出る方なるしやくやめしてこそ志賀の浦舟　高井

名所

**老上川**

○鴨の宮　濁の池の中にあり　本地弁才天を祭る　○玉水の池　街道の右にあり　○捏本原

**乳母餅**

紅建名蘭にして且玄流藥と多年常に人の餅のゆ実ハ圖の傳と記と

○乳母の餅の起ハ標石の矢橋の船場まで廿五町と記せり即茶の傳と云ふ

**山田矢橋の船場**

西小の浜より石場より船にて渡ること五十町の海上之山田の浜

いまを為物を渡と　経景つゝん方白賜布の浜布を長く敷るゆゑ南いせたの掛

其余湖辺の眺望ハ押しなべて一景と

堀後百首

ふなてるや矢橋の渡をこゆる舟をいくそたびかせ行ら　兼昌

**鞭崎八幡宮**

矢橋明の傳よりハ　祭神三座中ハ神功皇后左ハ住吉右ハ高良也

天武天皇白鳳四年大中臣清麿勅請之傳日建久元年十月二日頼朝

上洛之時此祠前を乗馬上ゆゑ鞭をあてゝ通る神ぞと浦人ハ



○紀四月中午日之古い大社之ゆゑ　○大蕚新田　○月の淪池村の入口

間孫度〜より乃ゆ今い其形斗なり　○玉水の池　街道の右にあり　○捏本原

# 乳母が解

むかし一条通り西洞院に藤原氏の二位殿と申す方京にて義賢と云ふ
永禄十三年九月信長上京の時以其の家の没落のうらみ深き事ども
の後代家のおくれの上にありしかば子孫ようやく衰微
せらるゝ時幼児三歳なりしより最期に臨んで其の乳母と称
やまもとき山さまをひそかにふくめ育てよと頼み貞宗の刀と
ともに預け置くに乳母ようやく其の抱き奉り
頼むう切ぬけ二条を離れ九月のされと共
前のように抱き大名なる者の妻抱きたるとも
慎ましうの人のあるまじき其の妻
ぐまたとそうのはのあるまじき其の
てまんやしなる○さて
幼児は十三歳の
時受戒のとうり
み門を入りしい長
もろ山及んで系

所高家其の子孫
と云いて産業武
神一の品販売を
開き近江屋
と号ず男子二
人女二人を儲
の者ばかりなり
は流のぼ縁と
なりて仕合せ二人
り南ひ初後さを
こ記と其の外よ産
と云ひ仕合せ
本業とし醤油を
紗ひろ其の外尚自宗
の刀は拾仏べしとぞ
まろる
乳母が名は代々後
きて深い夢へろう
乳母が忠志る
光金一乳母が忠志る
感涙甘露の味と
勝ろて出家就
法ろぐ
ものろし

国立公文書館
National Archives of Japan

## 矢橋の

拾遺集月の夜舟とよ
物語よむ〜湖水み
舟なくしく浦海ゑう
〜ゑ此舟の出来る由
悲い志賀の道りに月
とい拾遺みるるが多の
うちなる拾とうて〜く
聴ひ々る男ある夜流
を流〜〜ゑ〜〜ゑ〜〜ゑう
伝ところ〜〜ゑん我い乙田
丑年程うる楠の大木
ゑるるが其本と切て
ゑ丑遣う湖み
のゑ〜ひせんと和の
守より流ゑあと切
べ〜と宣り奴拾も
其舟ゑ方人うりてもう
でうごく是其所

脇門ゑ強〜〜ゑる男ゑ
を不の字ゑ民ゑ拾ひ
ゑいゑ乙べ〜と
其紙をゑゑふ〜〜ゑ法
ゑ紙ゑふゑ丑て扇みて
さし拾ゑば忽ち舟いと
ゑべ〜〜と悪雲のゑひと切
ゑ〜〜ゑむゑけ〜て矢ゑあん
の如く舟の勢さんば中〜のま
ゑいひ出く其れゑ紙
とげうりとそ

十拾沢い三年ゑの怪ゑ乙田
矢橋の後〜舟の夜ゑ
人ゑいとも月のさまで
自ら 和もこゑれ出ゑん
とゑ河ゑ分ゑくの戯作と
いゑ人ゑれども一場の真ゑ
作人のく

易祥なれば八幡宮のうし善ふ大將自急き馬ようりて偽祥あることの因て鞭ちとうりとゝ

○按るに鞭ハ義ハ遠るゞ古制之英雄の説者ようり鞭を制こんを意と

ことゝひ合されば昔此地に似たる義樹ありて絶えより神木なるゆゑ又義樹と神の愛樹とことらくれ

の墓ようり英雄產ハ行の振るれとも昔ハ義にて遠ようるもみゞ今そしも者の鞭ハ義なり

三本社れの辺正一位三本大明神の額あり義を以て神の愛樹とこと春日の神

を祭ることもつて神のに射あり是郷中の指みて良家紙民の分源をお明こと

附言 寫九先廣公陳彼記云やえうり英雄を遇るふるの遠ようるを再ことてあ本源こと森

あり里人ようる同へば毎日勅請ようもうにようおぐこと

神もまこうりくことしてまがあうん毛も毎日此義ことそこけ

○私ようる此地の説舍ようる義屋某ようつくあり其家今既ようる十三世にて紅号を義屋と孫ようるもつて

地義の縁あるようり似ようり此を詠歩ようる毛ようる又右義之英雄ようり守ようまでを弱年壁ようる

家に樫義ようる化石あり毛ハ栗古那の栗の大なるのようるあることそこれよ亞相中山君の記事

黄門日野君の詠を詣ろ

表

裏

化石之譜見藩邦代碑福湖東石亭所録之雲根志品類有数属者近江國栗太郡
草津驛舍長駒井某者持栗樹化石来而乞其名且記之方今獲審親之其高二尺
餘斧削痕存而不煩琱琢自然成置崖層峯之形峭壁攢峰之勢尤足愛翫雪淵明栗
里碑石之名何答栗本栗石之奇不啻悦目而適心而已不響不崩永世宝傳應為
一郡之霊鎮矣今名之以活人之享蓋栗子其功是以活人石之宜襲其德蔭無
窮因書以還之云

寛政甲寅晩秋　　前権大納言藤原愛親

○近江國栗太郡ようの化石を

そなへこれさうへうのむりれ本ハいそかりて受くしてらちせん　　従一位　資按

常善寺　由緒有まこ縁既賠之

草津川　村ようまこの小川ようる。下新屋敷。岡村　徒ようる本高　牧の墳ある。目川。坊袋。川面

川つゝれ池　右の方にあり

附言 茎澄ようる祢ようまでの弓九百ようる村ようもうびてまこ元紙を制を元近江國の名産にて月茎の元

灰塚山　川面村の左の上古の大栗の樹の技茎を焼ようる灰のようにぬりうこと云

絢　此村ようる尚陣営の地こ陣中にて

茎利義尚陣営の地こ陣中にて

茎経義元氏傳を講せうれしこと

多原　又織氏及村　稲荷の小祠み　此村ようる昔ようと茎ようるもあり

既ようる山中一ようる話ようる書にて鄙縣の賈人こ妻まの賈ようる村ようもつて

出ー紙ようて偽氏ようるとて後ようる祢ーと蔵ーて奉ようる

○小野

左本若海名中仙名
左本大明神
末社
末社

草津
立木大明神
拝殿
末社
社

三上山　一名繖山　連山　[illegible]

益須郡[illegible]この山の石[illegible]菩提[illegible]
[illegible]絶景
いんかさ[illegible]三上山の頂上三ツ峯わりてうづよ似たり

附言　伊勢物語七ケの天[illegible]
名書よりは尾といこの三上山の異名と其[illegible]
うづに似たれば
赤人[illegible]
[illegible]浪の三上の山も海うしや
月よ[illegible]
塩尾のやま

今按ずるに山をりて其[illegible]
[illegible]
[illegible]山を

[illegible]
[illegible]
後人の[illegible]
[illegible]
赤人[illegible]
七ケの大[illegible]

富士御[illegible]の詠

[illegible]
富士のね
遠き
[illegible]
をく
三上の
山のた[illegible]雲　業孝法印

三上社　[illegible]の三上村よあり

祭祀天御影命　尚宮の[illegible]
[illegible]

梅の本　六地蔵村に昔大なる梅の本のみ茂りあり

是　齋　和中教　元祖津田宗左衛門より繁昌の地なり今へ代々織田長十郎を祖とす

世業は和方にして医書を以て家を和中教の名は後にして業方は悉く異なり

和教本家の侍ども云へり○同村に定歳と名乗て茶道の名ありこれ

九品山善光寺　曲泉　未詳　○上野　○林　○仁物落　○金山　の方にあり

この辺を石戸と称す石戸の名方あり

甲賀郡　甲賀三郎　兼て甲賀三郎の名○信楽地志甲賀信楽の

甲賀三郎貞盛三男重国三郎兼家の子なり朝廷に仕へて勇名あり男子三人あり高と重国を命ぜ

三人共実義一二人の名を以て兼家に遣ぎ命を受けて武威を

退治の時軍功を賞せられて近江国甲賀郡一宮の奥社音谷に

佐那具の居城を其墓同郡阿弥陀寺と賜ひ甲賀郡に守と改む後信楽国を賜りて

石部驛　後のしなのいそのしらくに

万葉　白檀石邊山常石有命哉憑下居

○代匠記曰古今集に採弓いそべの松とつづけ

○人麿と往せり又佐く赤兼後に後ひ

○万葉集に人麿と往せり又佐く赤兼後に後ひ

○代匠記曰古今集に採弓いそべの松とつづけ

○人麿と往せり又佐く赤兼後に後ひ

梅の木

色若代経
春又
あくまの
清香を
数ふる
むめの木は
栄うり

信海

新勅撰夏

夏衣ゆくても涼し梓弓いそ人のふる乃松のしら風　家隆

石部社　石部の町の延喜式廉塩上弥社甲賀郡八坐の内上の社に吉姫大明神下社に吉姫大明神を祭る世記曰倭姫命阿佐加潟より渡りおはしましたる多年連ホガ祖宇賀主ぶる吉比女吉彦二人来りあいき其子吉姫地にの御田米麻園を献ずるとなん国て系宮に由縁ある社なり　啓蒙

落合川　白雉川ともいふ。東の村西の村の境を流れ落合ひて落合川と名付

▲阿星山東寺　長寿寺と云天台宗山門の末寺の位置天武天皇建立伝教大師の作天台山門の末寺常楽寺と云寺号観音三尊の堂あり八所社を合て天台山門の末寺

▲阿星山西寺　両寺とも鬼籠の法会あり其名を称ぜ今こゝ云

西寺に正月十八日東寺に正月廿四日なり鬼籠の面芸至武の御代より傳りて其古俗なり

其松多し　栄もりうり堪うり

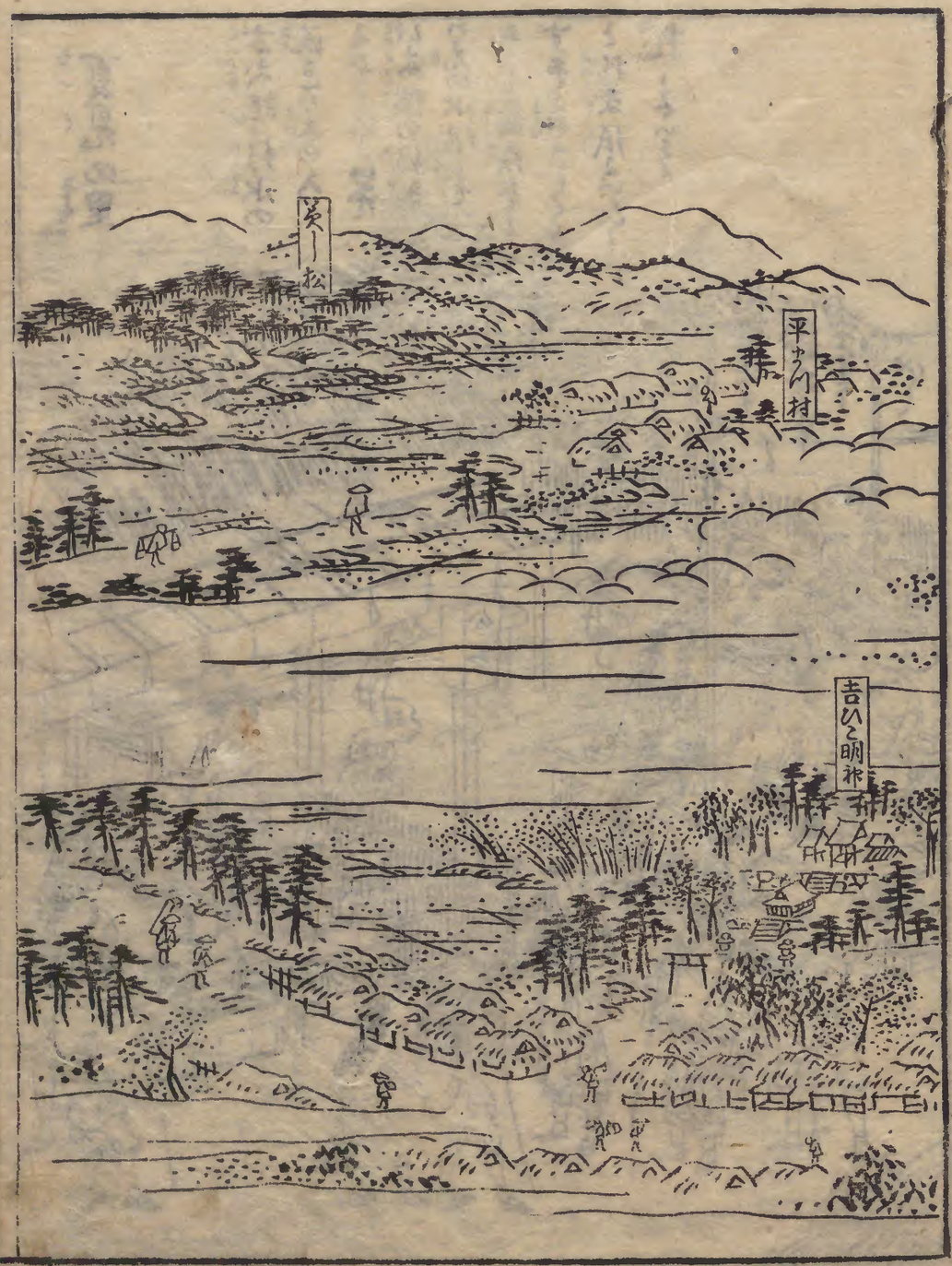
柑子袋　○平松村　此村の右の方の山に一山九二町余の間平地松多て其生ふる形一樹にして根下より数十幹を出し其幹枝葉うり

針村　入口の小川針川と云名あり。松茸集る伊勢国の名不と云ふ伊勢国家集

此川の名代実に有り始く実に加へ

ゆ衣ぬふ針川の吉郷の糸ようう紅葉も来よりう

里夏身　近江の琵琶の浦と云名不あり但し此ところの名後る　貞恒




## 石部驛

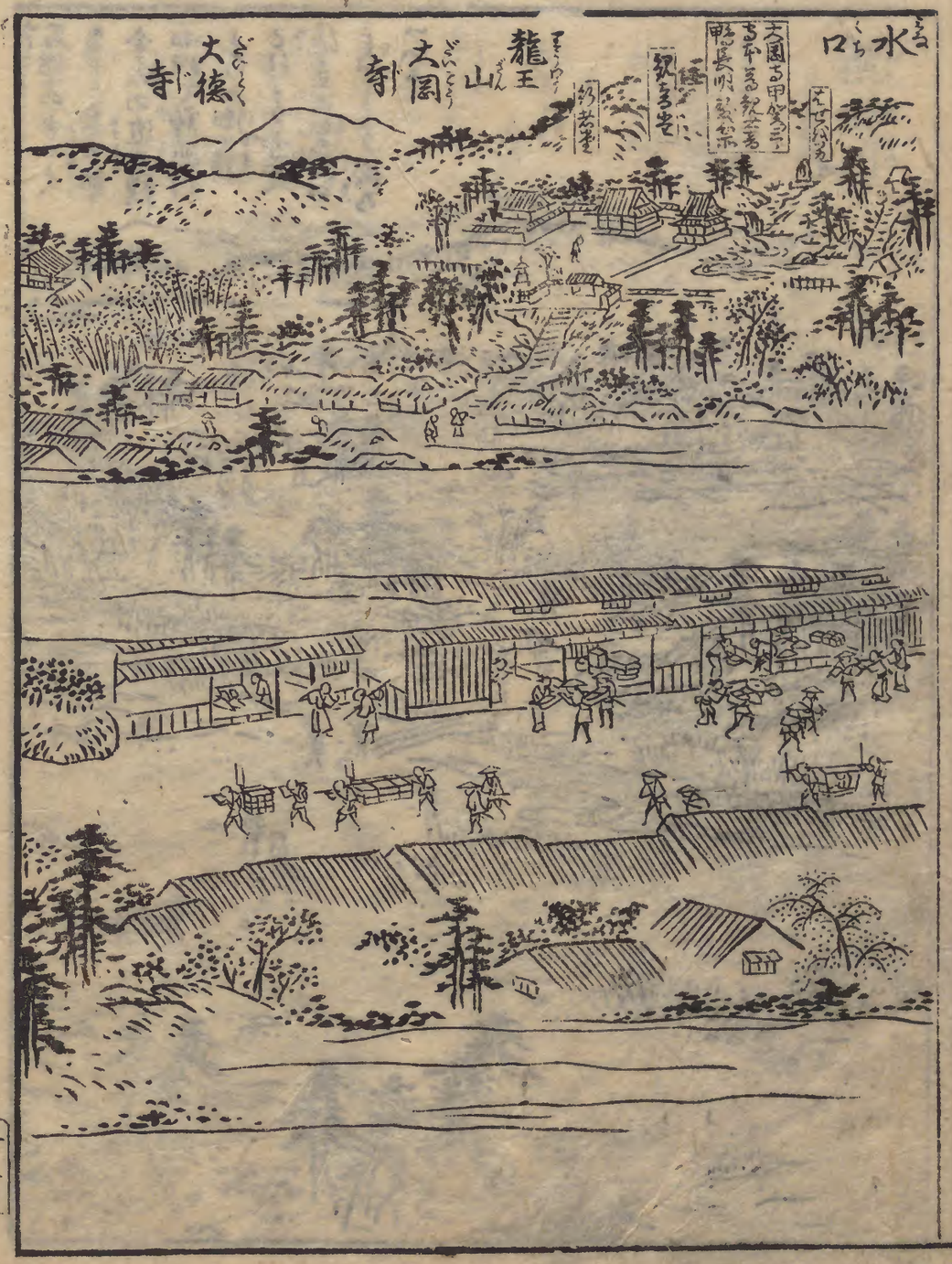
宿のひがし
平松村の後の
押うよ笑い
松ちよあり

夏見の里
古文記に紀水の流れとハ元のみなもとなり
山本備の紀水いえの水にして
元ハ山麓をもとそ
ず者ゝ迄ゝ
と花茎紙ゝ
記ゝ
かち

二本松

横田川
一名石部川原
横田川石部
川原の蓬生
秋風さむし
やと
長明
源八甲賀郡
大石原の山谷
より出て太郎の
東小へ出松尾川
と合し横田川
南より
又西小へ出く

石部の小うへ
金山の近辺
小にて野洲川
とつふ勅使川
これより小西へ
流れ出て甲賀村の
へ入る



甲賀三郎
ぐんの上文
郡名の和
記せるごとし

長明愚
のつゆ彩古
今集の場古
あるひは十訓
抄よりろ和
大原ろ八て
僧となり
蓮淵と改む

山夏身　此石橋川の名酒又は李しもまた名を傳る茶屋多し其家無さしまし水を汲うけ水偶をめぐらして旅人の目を悅ばしむ

吉永　○三雲村　江南六角氏旗所三雲王馬之助

横田川　土橋あり○西の方に山あり　横田ふらら川の西上に○田川　小川あり横田川西の岸なり

○梵字山岩○烏帽子岩　ふもと川ふちにあり

泉村　光廣卿道の記に泉とかゝそ

夏の日はゆくてにぬるき風ふるもあるかとしるべかな

北脇　費の内に八幡宮の社あり○林口○馬場先　南の方に食傳山飯道寺あり岩本院ふらん傳

正八幡宮社　水口本戸の外を林口ふらん先より尤後に小林の神社の名あり傳に村上神とふく其神石に神泡石あり神人先を把て拍手をなしてふりたるを

水口驛　水口山遠望

太宮社　柳下の南○太德寺　淡玉宗之細画の上にあり

城山　大義ふらんふ傳に甲賀ふらんふ誤りと　長東玉蘇少浦筑る不ちり　○英賀郡天神　義秀女源氏郷に祈る事傳に

布引山　水口出口ふ先に見る山三里ゲ向岩にある紙ふく滝布を曳ふるごと

名寄

見ふく雲のたえぬをとうもむふく滝布引のふ　長明

栗林○新城○小里○外形岩○岩神○今在家



岩神

祠ふくて岩を祭りふくしを村の人見れしふる

山岩の形ふ抱き出ふく旅人ふ指ふて其ふるの名成宮を俗ふしてしを

大石寄石ふ

星人ふ向ふ

右の方に川あり上い出ふの奥より出ふく横田川へ流れ入る

## 稲川○山口志兵衛重成清泉碑

山口志兵衛重成者勢州之人也本性佳山氏初名盛治號三左衛門其父甚左衛門吉久仕飛彈守蒲生氏郷領鈴鹿郡住山村娶小川左京女生一女三男長曰内記也盛治者其弟也氏郷移封奥州吉久亦從之盛治及十八歳來江府事修理亮山口重政慶長十八年重政及嫡子伊豆守重信右故件吉竄于武州入間郡生越龍穏寺重治辛勤竭力奉之元和元年攝州難波戰重政重信屬掃部頭井伊直孝下攻之河州若江重信一番合鎗先獲首級其身亦被瘡冠兵進至盛治從其役與同僚両三人擊退來員重信帰陣重信得免既而没重政嘆盛治戰功踐跡示感書畀山口氏及其諱字且授家紋於是盛治改稱山口志兵衛重成乱平之後重政赴高野山欲至南海使盛治事雅樂頭酒井忠世寛永五年遇赦帰江府仕幕下采邑依舊同七年重成帰仕重政同十二年重政易實次男修理亮弘隆嗣其家重成勤仕如故正保四年弘隆奉台命守沼州水口城重成從行水口土山之間水之行人苦渇重成聞山麓清泉湧出盛夏不洞掘井千稲川疊石爲甃大爲行旅之便兼應三年五月十六日重成病死年六十九號即翁了心其後經年土崩石傾其子志兵衛重主頃聞追其志畢修覆之功依价者請記父之履歴固辞弗措乃述其大槩作一絶示之

從役難波揚勇名　稲川療渇本源亨
清泉日夜流無盡　洗出忠心一寸誠

整宇主人春常法眼林重民識
孝子山口志兵衛尉重主建之

延宝巳未冬

金毛院　光子内親王御筆の額あり

龍樹大明神　郷名居あり　伊佐地○今宿○大野○徳原○市場　伊場共云○前野



松の尾村　右の山上より松尾大明神の社あり　毎年正月上の酉の日祭礼

古山驛　西の山より長谷　右の標石あり　○一里山○義理野　元禄の標石あり　人のうむまらぐく不あり是い板の社りてかいらぐくあり

田村大明神の社　村の出口より右の方居　正一位田村大明神と額あり　坂上田村丸の霊を祭る　別当あり神宝多し

切接彩色　後二位田村丸を祭田丸の男大君の孫刑勇衆を統て其名聞兵の味を博る又某の奥紙を染紙を染紙　○松尾川　一名郡の白川

田村川　橋あり　明神の傍　一名白川

田尻野　郷名左右の村名

解ケ坂　地名中まる細図上に記す　右の谷に蟹の塔あり　○猪鼻○山中聚楽寺　岩屋仏祀

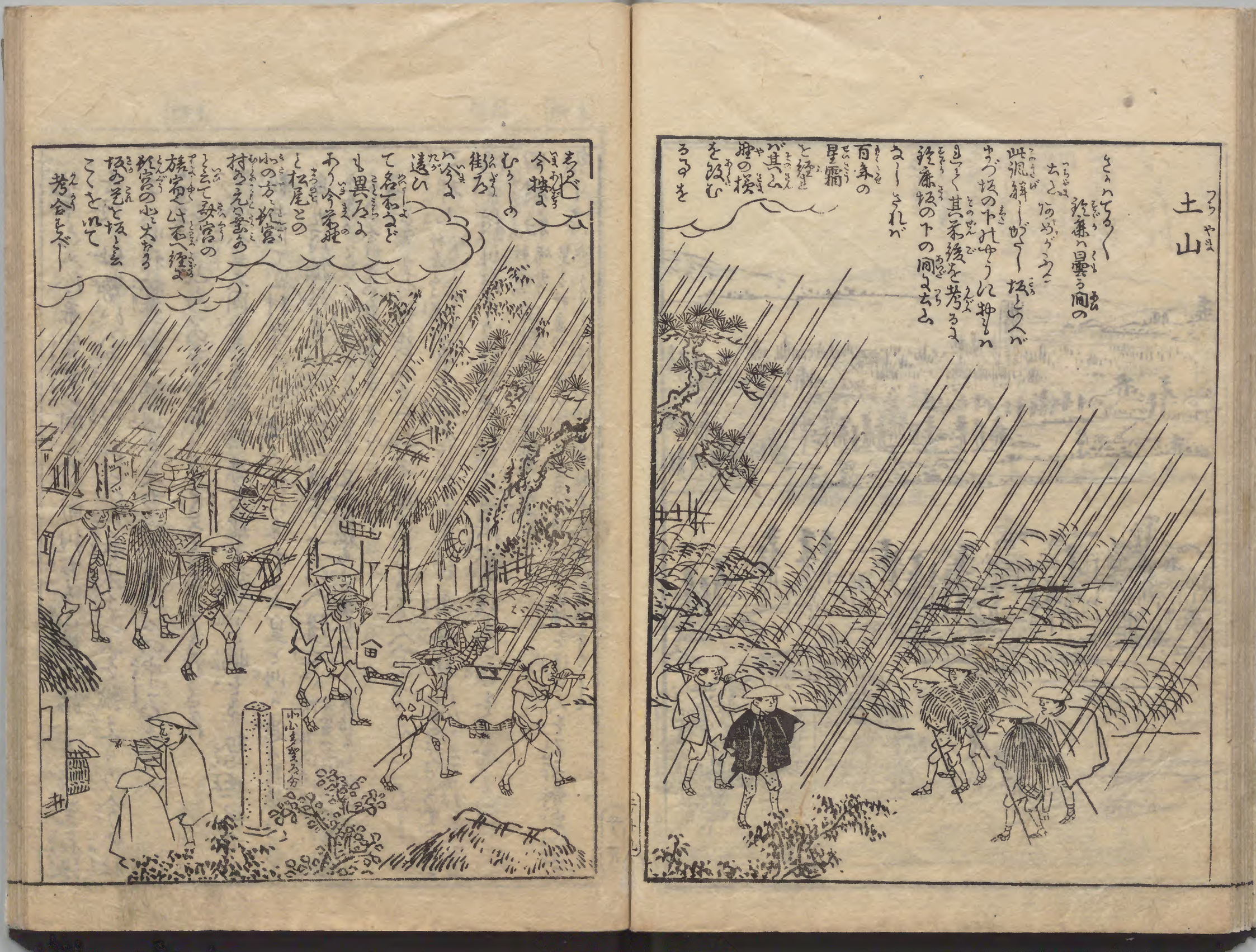
右の谷に愚和尚開基祐天の名号あり　○擿　○澤

▲江州勢州國界標木　発永十二年の古の塔切り　発永の年号の塔切り

鈴鹿山　をべて鈴鹿の山を今の御道を挟んで南北より聳也古俗八百

いさみ川
此川上を松尾川と云一名浦の白川例幣使此川を渡して飲料の駅宿にもつらとなる決定なり
いさみの川
水口境
いさみ川

山口流水碑記


土山
さかいてる〳〵
近森い曇る間の
ちと なのめがうつ
此風雨しめて〳〵 坂とつゞ
きづ坂の下れゆうして 抑もい
まつく其系後を考るよ
近森坂の下の間よ去ム
ゑ〳〵 されば
百年の
星霜
と経
が其ム
狸の模
を設む
るゆを
ちゝび
今模よ
むゝしの
街乃
い今よ
遺ひ
て名不ゐど
も異乃よ
あゝ今家飛
し松尾との
ゆの方と松宮
村ゐえい家の
ゝとて孫宮の
旅宮と什石へ繋よ
松宮の心と大ゆる
坂ゐ元と坂とゝ云
こてをれて
考合とべ

八台といふは鈴鹿官道の間凡廿六町往古は山城宇治より伊賀名張を経て伊勢に入る其六ヶ所は此山の内長岑といふを越えしより今の社より二町程林藤へ出る細道也是古哥にいふふるの中道なり

家集
すゞか山ふるの中なる君よりもきゝまつりはやそおそれられけれ

○平城天皇大同二年逆賊鈴鹿に籠て旅人を悩まし禁廷に訴ふ勅に因て田村丸これを誅す又弘仁年中に上皇と此に遁る其後延喜七年九月捕鈴鹿山群盗其張本十六人誅之云云 昔は樹木茂りしが山魅木客の栖白波緑林隠れ家なりといへるも実にしかれども今昇平の化にてかゝる嶮地も往還の憂なきこそひらへり君の徳沢なり

後撰集
すゞか山いせをの海士の捨衣塩なれたりと人やみるらん

三神山 鈴鹿山の三ツ並の峯をいふ 是を古名片山といふて三神の旧跡の地也 伊勢の海人此山の雲のさまを見て日和をうかゞふ これまさ

坂下村 此ほとりに鈴鹿川橋あり洪水已後山の根を古町といふ

田村社 坂下村鈴鹿の 田村将軍の霊をまつる

かゞみ石 是も鈴鹿の山中にあり毎年二月八日注連縄を張て人を不寄愛宕出現乃地なりといふ境内のさゞの社も鈴鹿姫の霊なりとぞ





○たつゝみ坂 すゞか山の坂の名なりかのすゞか八丁

鬢颪
秋かれは神もあはれとすゞか山麓を雲と見てしらぬこの山

○鈴鹿神社 本殿天照大神荒魂瀬織津姫尊気吹戸主尊速佐須良姫尊相殿にて座ます後に倭姫命を合祭りて別号を片山神社とも縣主の神社とも申ス 延喜式に片山神社と国司より造立ありて斎宮群行の時ここに駐輦し給ふ又斎宮群行の時此所に頓宮を設けて伊勢路の始なれば御禊し給ふとぞいひし 今の社地より南の方の坂の下の道の傍に斎宮身曽貴殿の旧跡ありて此頓宮身曽貴殿より八丁ばかり上にあり伏見院永仁二年春二月火災ありて今の坂の下の地に移し奉る 此所を是古のなり今の本陣といふ地名残れり

○頓宮 斎宮群行の鈴鹿の頓宮にて旅の おもひを行りなり

新勅撰集
いそぐともまたなれそめぬ旅寝する芦のかり穂の露ぞちりける

通俊

○すゞか川 詞花集
又月夜の日をふりすてゝすゞか川八十瀬の波に声やまさると

皇嘉門院
治部卿

○橋の弁天 弟と伊勢の海の硯のうら

むかし参考宮蛍日昔斎宮鈴鹿の橋板にてつくりたるやまと琴いふものあり其橋板のうるさゞは鈴鹿の社のうしろにありしが代々帝の宝物となりしが今は其本造の名もしれずいよいよおもしろしとて合せ鹿跡のあまたなりつけて鈴鹿のあやまる祠宮守まもりけしやせどそこらくりかえるふ坂の下といふ人不知に橋板の弁才天とぞ

# 田村丸誅仲成

加茂白太祢宮祭記云
嵯峨天皇弘仁元年
去上平城天皇藥子の誘ひまゐらせ兄仲成が
しゐるゝ御怪復らんがゐる都を迯んとを思ひ
よりて勅ゐて諸関をゆくゐる田村丸を大納言
として禁中をゐるしむ

上皇大に怒りて畿内紀伊の兵士を召しつゝ藥子と同輿して関東に赴き給ふを又田村丸を大ねしつゝ屋綿丸を副將ゝして御幸をとゞめむ田村丸身の大ゐなるに拾ひぬと涼く加茂明神と祈り即弦葉の関をこれと遮る此を扨ひて為陣戦ひゐる小彼神力の加りゐるあや粧ゐの軍兵ひし動く汁こ見ゞて遂て仲成を射殺し上皇を宮ゝ還し奉ると云

後世田村の謡曲清水の観音佛力を著位せしはゐるゝのゐるゝゝゝ

国立公文書館
National Archives of Japan

まつりありやがてひらきせしくおがむよよのつねの弁才天にはあらじまがふべくもなき標榜なりけれど
又日精ときどうの王ハ伊勢より役行ひしが鈴鹿の石橋にて作りたる硯を直に伊勢の海とよバ
せ給ひし其かたち今に鈴鹿の社にあり石ハかて川のむかさき世までのこれりといふ云々

橋の弁天 ハ一里塚の東の橋詰にあり　尚関の地蔵の事ハ下にくはしく記す

○岩屋 左の方に大きなる山を切ぬき自然の石室に結びつけり内に阿弥陀観音地蔵を安置し其かたはらに清泉斜に流れ落る故に清滝の観音と称す

坂の下駅 むかしハ鈴鹿の山の麓にありし故坂の下といふ然るに慶安三年九月二日の洪水にて山川田畑民屋ことごとく頽廃を依て公より修補を加へられ十町斗東へ宿をうつさる今の坂の下是也 古名是を鈴鹿の駅といふ云

金蔵院 仁寿年中慈覚大師の開基鈴鹿山護国寺といふて日光の末寺

本尊ハ薬師如来 堂中に伝教大師感得の一寸八分の尊像胎籠すと云

往古ハ鈴鹿の麓にありしが法名の後此所へ引中興開山宣盛法印中ハ慈眼大師の法脊たり

小女溪 官道に橋二ツあり橋名同じ駅の中程と東の端とにあり

法安寺 禅宗にて石仏庚申の像あり　焼地蔵　沓かけ村 寛文の比此地に移して 加茂盤翁の敷もあり

石工近国の名所なり

櫟の木　一里山　朝日弁天祠

権現山 参詣拾山の巻とあり古居石垣のうさあり今地の字に残まり 由緒ありて名付しよし 鈴鹿郡誌にあり

四軒茶屋



# 蟹が坂

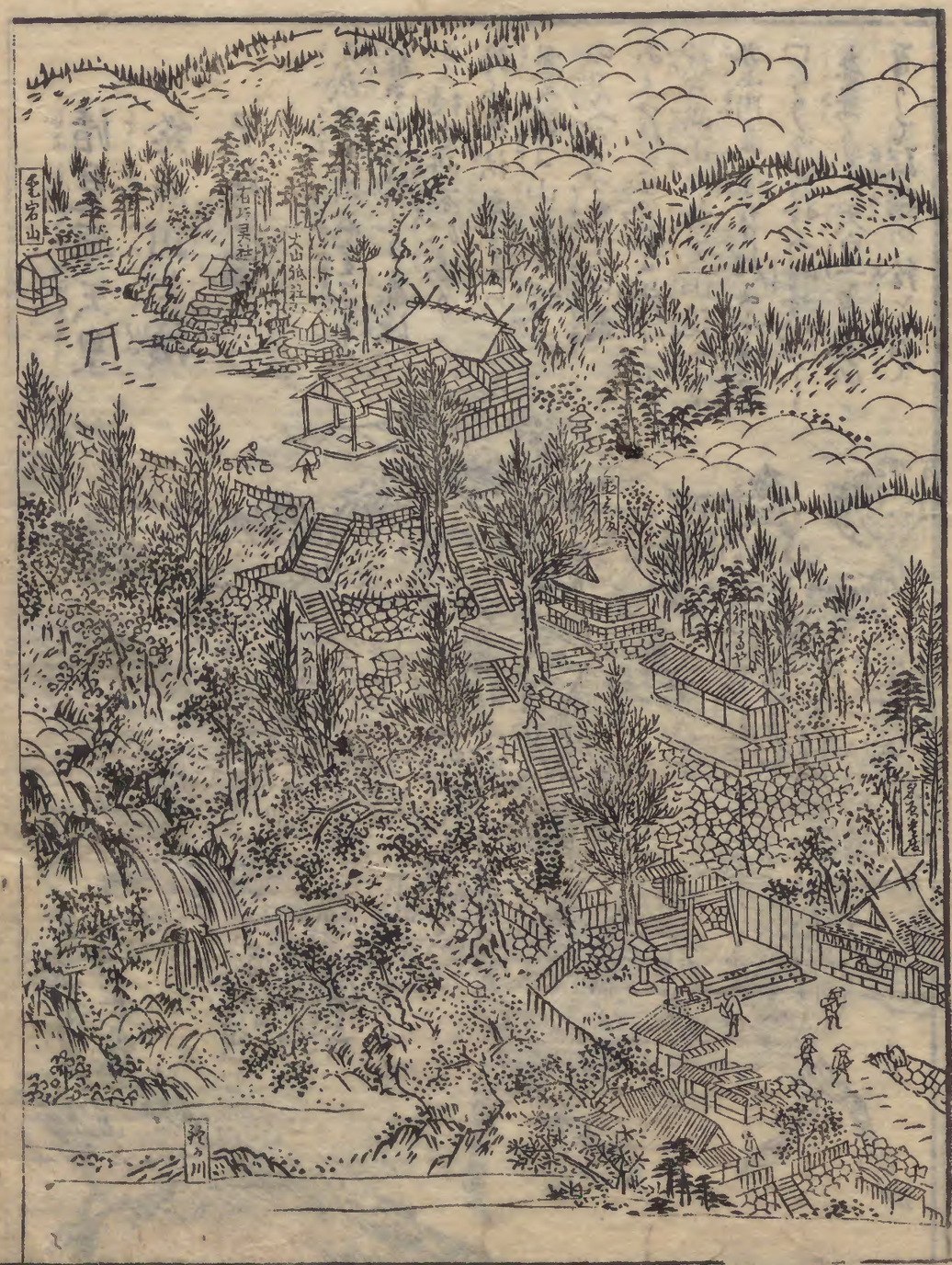
世傳云昔此谷に大なる蟹ありて妖をなして人を換ぜ旅僧是に會て佛經を説き偽て是をおし殺し其塚を築くと云

或云昔此谷ハ山賊埋伏して鬼魅妖怪を企なし人を威しく物を奪ふ賊を名て蟹といひたり世に横行せる者なりしが日本紀に土蜘蛛と有ハ則賊の事也是同じ

## 山中

雅康卿関東街道記
山中にて不
にてわくぎ
ものなく
ようふこるる
それうと
なけば
ふかみ
笑来なく
もう
わくぎ
道の傍の松の根
の中ごろ来あり
高木にしく
ものあり

筆捨山 岩振のもと越前守石法眼狩野元信が画図の所
羽黒山関の中ゑより北所斗小さ岩ふあり但し筆捨ふ連れ山なりとは
ちゝみ出を一ふ名もいなる大石層々しく蟠踞峰石其数を不
知ゝ虎豹熊羆の栖ともいふべし 巖中に小祠と籠り 則出羽国羽黒山を
たゝ俗のいふ権現の勅号を賜ふ信忠信兄弟不用ありて上洛せし時此石にてるやゝ
遂よ本国の羽黒ふ大権現よ祈誓をかけて其後勅使せしこそ
亀石○天守石○布袋石○瓶岩○よさぬけが別
○茶端の淵 ふとの深潭あり其外寿石かぞふるふしるし
一ノ瀬村 平の盛信の古業にる一の瀬とづくりもあり ○一瀬川 此水上ハ桜谷川。清川。ようしと川。あぐさ
川名なり皆三郡ふより流れ出て八十瀬ともあり
まるひとつよりて一瀬川ふ名産伏見川ふ合て関川ふ
○長持石○ろろび石 姿の似るのこと
関 今驛宿の名ともなりたれども 関屋の宿関の驛西の入口より二三町東ど
中木戸町ふ此石人名の間に細き小路を南へ通る不着の関屋の跡なる
よりひ傳ふ○御影嫂塚 里縁奥ふ出を ○火縄 名産なり


毛宮山
大山祇社
鈴の川

田村明神
鈴鹿峠
鈴鹿山
鈴鹿權現社

清見原天皇
鈴鹿川を渡る
の図

天武天皇大友皇子と
龍田山吉野より鹿源
を経て此不破に至り
給ふ鹿伏兎と云い
処へ時に山中に燈
の光りが忽一人の翁
あらはれて天皇に謁して
我は此山の神大山祇と云て
案内に添参れと水増を
つくろうて給ふ此翁の
鹿来りて天皇と夏ひ
まりて駅路の絵と付て

国立公文書館
National Archives of Japan

清游記之五
坂の下
吉名雅泰訳

此郷の産物
は坂の木櫛
坂の弓弦と
て北畠教具
々の記に見え
又可鮮鰯
を以て漁者之
こゝ
と小石
流れく谷川
なるみの浦合

## 鈴鹿関趾　捨苅抄云　逢坂。不破。鈴鹿。〻日本の三関と云。續日本後記曰

桓武天皇の時始て建後醍醐天皇の御宇に関所停止（東海道へ往来使者往通しあるべし禁制）

帝の朝崇峻帝聖武帝天武帝の朝よりあまたゝび関所を設置し伊勢の鈴鹿へ通信せしもの也孝徳帝の仁和二年新道を開かれしより関趾墓となる

ちゝ昔の鈴鹿の関は上の方よりあり一ノ宮の南より関趾墓となる

地名を見る後の関屋の跡としるし伊勢くりの建仁二年水無瀬殿の歌合長明が記す去る

こゝは鈴鹿の関い今の関宿よりみなと又くりの関宿の中町の関屋跡のこゝ地名あり永

孫十二年織田信長伊勢国の関所を停止とる関宿よりある関所なり元鈴鹿の関と九

倉不破をうばゝ九九関のこゝ彌地義堂よりのこれり関宿の新城あるひも新所とよぶ

悉領鈴附孫より小松内府重盛公の十八世亀山の城主関安義守盛信武勇をたゝえる

九渕川九近一益と合戦の時此地より新城を築き防ぎ戦ふこれも元亀四年のゆゑなり又

勢陽府志より天正十一年八月末侍より新城を築くとあり其ゆゑを問ひうまて年月地

名はゞ一たゞり返て考へるべし

## 地蔵堂

九関山地義院宝義寺とゝ。亀山畧記云真言流開山應宜僧都也若狭白

比丘尼八百歳自筆の宝義寺と記を額あり又宗長紀巳の記より地義のそる像

は紀基の作とし鈴鹿郡誌より大は元年の建立して其後田孫ぜり今の堂い元孫九

年の建立なり勢陽府志より地義薩埵像本堂向傳教大師の開基其後文應年中再焼

此時尊像焼滅せしゝ文明年中再造像本堂とゝ再興あり此時一休開眼の導師

ゝ又ゝ後又田孫ありて元孫九年建立なり勢陽府志

## えゞり橋

新後撰集　いせの勅使よりもるひて鈴鹿の関を越るとて

えゞりはねこしやをくゝみ関ゐるゝ捨るゝ花のうけゝる　定家

筆捨山
本名
山石徑
山城
羽黒山接続

# 関地蔵堂

勢陽雜記云 文明年中尊像再興の時往来の僧一休和尚を招して開眼の導師とす其偈に曰

釋迦ハ過ぎ彌勒ハ未ダ出ぬ間の浮世に開眼地藏

此橋ハ地蔵堂より半町ばかり西南側小橋なり去清彦翁のりのを其古掛とかくいへり エゾといふハ神代文字のえぞりるゐの言葉をとりてつひつくへうちすれべし 蝦夷人の杖とさしうるがすみ出るともいふ又西行の杖を切る跡の椿本より芽を出しけれなど勢陽府志の説を信じがたし

**久我村白石明神** 此神ハむかし小松内大臣重盛公の御子資盛のありて此所へ流されてようやくひそまる神なりとぞ其末孫又ツるもありて又ケ谷に城郭をうけ又ちまつしと之関の西より掛山ともいふ ○**城山** 古へいへるごとく今古井の跡あり古墓関長門守ころも此里に遁れたまふ なども出る

**御新姫塚** 関長門守妻の塚なり関氏が家老羽若彩右衛門遠く神戸氏の女なり ○**三日城** 信長の家老五川盛物三日籠城し不落なり

**和琴の橋** 上古より天子の宝物に玄上又鈴鹿〈六絃〉といふ和琴あり其琴を禁秘抄云累代の宝物なり但毎年御神楽に一万人用之○口遊云和琴鈴鹿累代帝王の渡物也又平家物語にも見えたり当宿の新橋と中御との間の小川に架る橋をこゝに名づけし又相の木島といふ田の字あり實に其名ありて南の里明神の森のひがし鈴鹿郡に出でゝ又渚の釼路といふ今往来の南田まで通ふるにやどりといふ地名あり其名前の川の橋に又記の記にハ一ノ瀬の希王橋の名をせりとも気寛の堂といへり引いふ人も琴の橋ハ此地を見としせんさあるに再びこゝに出す

**鈴鹿川相の古木の名古橋これなりや琴の書にみよすべし**

此和琴の建武元年の條にも見えたり 敦有の記にあへり

**川上山瑞光禅寺** 寺内に権現祠といふあり

亀山寛記云此寺ハ曹洞宗應安年中の開基寺領二十石三斗 中興開山ハ俊成

同異本開眼の話

一体の関東下向を見うけて彼開眼の
孝師を乞れば一体そゞ浴〳〵
尊像の一隠墓のゞりて佛
のかゝら人をそゝうゝふ後さこそ
開眼ハをとゝれとそ仏祈も
見どゝ〳〵てゝ清〳〵しく〳〵
老をかゞゝ寄りて水を
そゝぎ清めれば立ちまち
其人〳〵い地獄いゝ〳〵苦
てがさら苦みらし心ゝ
いひゝゝハ天下の老法師の
我目をひ〳〵をとびる物
と仰ゝそりゝ立ゝるそと
〳〵ひさゝるゝ者を
ゝり人〳〵ゝ乞ゝ寄ゝ
あへゝ〳〵く彼和尚の
約ゝゝゝ



りゝゝて生ゝゝ〳〵のゝ少
をひて験ゝゝ見ゝゝ
和尚このゝびい墳墓
を解て老と地蔵の
前ゝ纏ひ垂ゝそ
ゝゝゝる是〳〵も
神〳〵ゝは思ゝ
ゝ〳〵の考特ゝ
物ゝゝして撒への
ゝゝゝて纏ひ〳〵
ゝば物怪ハ来ゝゝ
ゝくて後和尚不治
の時其まゝひゝる
解ゝ老とゝゝの
をゝそゝけ墓ゝ
ゝるゝぞ

豊屋和尚之建立也禅光禅寺山ハ関ヶ原の合戦の時分村万松山永明寺の別流なりしを境内を関長門守源居関ヶ徒の居城と永明寺焼亡の後此地荒廃せしを會下村七十石余の寺領と此寺の古墨あり又天正二十年の古像あり○按ずるに川上村より湯津盤村なるべし今人家なし

**湯津盤村**　和名抄に見合えたり

**湯津盤の森**　関沢の東二三町ばかり今は此所にてとむらひけるやけこ　法華経清

**清岸山福蔵寺**　亀山畧記に坂本西教寺流鐵田三七信孝の香花石あり　本尊大日如来　開基大塚長政がらんまうなり

**追分**　東海道とのまうまなり　大名井常夜燈を建る方来宮道なり

**関川**　俗橋ハ九十間なり此橋九間なり延宝元月中関本修村の架る　貞享二年乙丑十二月の定めなり

**古驛**　村なり　**鈴鹿郡賦**　**古廐**　**神宮数**　**馬のやどり**　**石井**　俗云井なり名あり

今なる年を経て宮造りのおくれりのみ即神宮の御厩なり印なり

神いまはよいあしの面村と楠原村との間鈴鹿郡本郡の境なり　**○楠原村**　此村の東小川あり

水上ハ月郡福徳村の山奥なり　出る　**○天神社**　社村なり

**波加支神社**　延喜式鈴鹿郡十九座の中志

**林**　古墨松墨　**明應中林城中守祐幼の城址**なり

**観音堂**　大同元年の草創なり天正二年滝川一益兵火にかけて今ハ亡し

**中縄**　沙弥慶長己巳の古記に元和二年丙辰城主が此村を置年貢敷

**兎の地**　この村より西南の方に岩塔山あり

**椋本**　中縄の南の方にあり往来の大路へ安濃郡若出椋本なる安濃郡なり出

村中月江寺とかくる寺の屋敷なり　椋の木あり　里の名とそなふ

**宇渕城址**　椋本東西の郡中に宇渕城なり　**苔城**　**郭**　**関所**　**みゝ**　**絵本**　**接来**　詳

**高野尾**　鷲飯尾　其所ハ此村より天王の社あり　尊なるに号けしみや中ハ高尾なる神素盞嗚

**豊久野**　恵日堂記に云雄略帝の御時丹波国より豊受大

神を勢州へ遷し奉る時鈴鹿の神戸より此野に社宮を建

体ゝ世話に御路なれば等中に乳母とまつる

其古墨あり往古を一里まゝりの

**銭掛松**　**高野尾の東の瞰**　此年久しき一株の松あり是郡第

ふるまや
さくら川
いせうの内

関の追分
東海道
参宮道

いよ古神宮幷宮の御跡をうしなはるゝてまろ〳〵社ばかりへて小祠もあり又紙小祠も之て松のこゝおりたまい人〻宮に来りて古神宮と遥拝し御供料として松の枝み殘をうけて来穀乃さうへと祈まゝ〳〵の乃み殘掛松といへり。又伊勢國民部省圖帳殘篇曰豊國野 宍食 神霊者豊斯淳尊の社也間 宍食。是をもて按ずるに苟此野と豊斯淳尊の社あり し ご後此社のうせ亦其跡へ松を植て殘掛松とあるべし 両説の内圖帳の方も味あり殘り今の往来の辺明應七年ごほのゝ川より一身田山内 粉川 洞説老人殘掛松の一説ありて其説を俳優の文り 音節調るゝも其人の付る所あて其遥うてもる事らられを紀ふとも

## 野崎

この村 舊い山田井也 和名抄に田井とあり文々延喜式神名帳に多あり 神社とあるい即山田井東出の御厨八王子と云い是之

## 土岐の百塚

むま塚とも云南方記傳に南朝正平廿四年小畠内大臣顕能卿攻大膳大夫 まゞ兵と珍勢國に合戦して攻ゆ安級軍せるとて又くい此村のうちなる窪田村西の入口一町斗西の畠の中往来の大路の小ゆいに塚あり むま塚又云攻たる跡の塚ともいへり楠とだむの木と紙ちろ〳〵にうへり。古伝大膳大夫康政と窪田とて右馬頭より大膳を攻

## 窪田

此村の内馬場とゝる町の南の田地の字政不あり。東漁文治三年の伝法文に窪田の荘地とい国時系司廣元とあるとそれゝりと政不の南村り



あり〳〵文治より前の〻り此南の山際に菅原光山祥若寺と云伽藍の焼跡あり

## 光明山安養寺 本尊阿弥陀佛 幷基地十王堂あり

往昔伽藍地にて幷基菩薩の用基也 東福寺佛通禪師再興して其後法言の光賢阿闍梨本に此寺を僧侶文紙の跡殿して法會て今山地の上にも其跡のこりて法言僧侶村住せり。一説佛通従師を光賢阿闍梨と云郡明野ガ原〳〵住々り養中に神明の宮あり 稼を濯〳〵む其因縁に寺もあり〳〵〳〵ども今なくなりのこりて都て神四社と多べ

## 六大院

六大院村中安濃津恵日山観音寺六院ともに後〳〵

## 空也堂

冷井と西念寺 此村の東にこれを守る家三又彩あり 冬にもしが讃詠を唱へて鉢扣の修行に出るの系空也寺に同〳〵上人自作の像甚古物にて鍔にかけたれを証とし又八つ股の鼎の角と什物せり毎年十二月十二日法事を行ふ 縁起あり 奉安盛の板あり 他に門を付〳〵人に別ありの

## 坂部村

窪田村の村内にあり一身田の標石あり

## 例祭洲齋塚一宮

坂部村より大塔を二丁計南東石の小塔あり 菅原宮下りまと 時例として此川の洲にて水祭し 祭殿へ入らせ給ふと云今の富と 礼拝手拭ともいふ 菅原宮下りまと 又毎の路ちとの格より一町計東田の中に塚あり 俗説ともあり 是も塚ちるを

国立公文書館
National Archives of Japan

訛て又橋二町いづゝ茶屋村の西の入口の方にあり田の中に森あり
元応注田八郷の一の宮にて祈名帳竜蟄郡事忌往とも足ちり多
外の類に春日とあるは後世の
誤り之右彩川氏事忌考に委し

## 一身田高田山専修寺 下野流一向宗の本山にて本堂廿四間四面

祖師を安置を倩み十八間四面の堂に阿弥陀如来也（八角間後檀金善光寺同様）高田と云ふも下野国に有る所の名なり往昔法佛上人と申
る人下野国の産にて国勢をもつて人心深く親鸞上人を
帰依し剃髪して真佛と云ふ唯授一人の口決を上人に得て一向専念
専念の旨を弘め佛寺を創立し高田専修寺と云ふ法佛上人
より八代に下野国にあり名を舞九代大僧都法印真恵に定顕
上人の芳弟にて中国佛法の大願を記し加賀越前近江等と
経歴して伊勢国に移り先暫く小を化度し和に朝明郡大矢
智村光明寺に居し其後三重郡小松村中山に石に寺院を
建立して移住せらる此るに竜蟄郡黒田村哲祐と云ふ者急う

山門

其二
本堂

招請ヤて一身田に移らる干時寛正五年甲申上人世一歳
親鸞之由緣深くして若親鸞上人糸宮の射此地を入江の磯に
堅固の内に祀る之為て祀れる之為て御免あるべき之事
依之讃岐の霊蹟なるを以て永く住居し宗旨を弘めて永く住居
下野國高田専修寺を伊勢國竜鳳郡一身田に移し給へ足より一身田を本寺と
野州高田を為基の霊地として掛不可
後土御門流勅願所として宣旨被下置如左
高田専修寺門流事
如先々相續可被致生涯其外諸國門徒可有進退之旨
天氣不候也恐々以状
文明九年　　実恵法房　　右大弁判

又信長公勢尼公への招南寺十二世覺恵上人と甚睦くして勢州平
均の謀ると誘せらる依て南寺へ書送る不の禁制の如左
高田専修寺門弘　当寺境内不可陣取事
於犯之事　　右之條々於令違犯者可為厳科者也
天正四年　　信長判

此村の名称一身田と云ふ三代実録元慶三年丙寅六月勅参可国番号郡荒廃田
一百町賜函之内紀之為一身田と云ふ
此場所下さるる田地の名と云ふ苗此田を場所一身田と云ふ
境内の嬢姫梅と云ふ有迄一茶乃の拵と云ふ
三軒茶屋　平野村の　中野　大乃已所村
出郷なり　中野の森の中
大乃已所神社　中野の森の中　今は素女大明神と称せり　獅子吼一口あり
式外の神なり
大部田　上浜下津の町つきの小の入口也　右名を小丹乃又雄丹乃と東南海湾
浜辺に
小丹浦　鳴呼見の浦なり　順徳院之御製
夫来
ゆるやかに延曳の美砂の白之如月けもあり
勢陽府志之志広の國のちゝゝて當國飯野郡安口麻績神社の条下に出せり
塩釜明神　塩屋と云ふ不にあり延喜式神名帳安濃郡小丹神社と云ふ
尚考へ合せ
るる異也　舊記之景行天皇四十九年八月癸酉不祭之社記
詳也

伊勢參宮名所圖會巻之二終

国立公文書館
National Archives of Japan